

＜止まった刻 検証・大川小事故＞第6部 地獄（4）骨になる前に 見つけたい

「見つかった良かったね」「早く見つかるといいね」

わが子の亡きがらに会えたことを喜ぶ。巨大津波の爪痕の前に、遺族は「わが子を見つけ出し、手厚く葬る」ことにせめてもの慰めを見いだしていた。

東日本大震災から1カ月、石巻市大川小の児童10人の行方がまだ分からなかった。鈴木義明さん（56）、実穂さん（49）の長女巴那（はな）さん＝当時（9）＝もその一人だった。

約1万8500人の死者・行方不明者のうち、小中学生は計351人。8割は学校以外で亡くなった。学校による避難行動中の犠牲は、大川小の児童73人と宮城県南三陸町戸倉中の生徒1人の計74人。教師の管理下で多数の犠牲を出した大川小は突出していた。

震災当日、休暇で学校にいなかった柏葉照幸校長は、震災6日後の3月17日、初めて現場に姿を現した。泥まみれで捜索する遺族を横目に職員室の金庫を捜していた。

震災1カ月後の4月9日、石巻市教委が初めて説明会を開いた。「どうして早く来なかった？ 見つからない子ども、死んだ子ども、名前言える？」。遺族の激しい怒りを受け、市教委は翌日、柏葉氏ら8人を捜索に行かせた。



震災から7年を迎えた3月11日。堅登君と巴那さんが好きだった料理やお菓子を供える鈴木さん夫妻＝東松島市の清泰寺

遺族はわが子の捜索、ドライアイスの確保、火葬の手配に無我夢中だった。そんな遺族を打ちのめしたのが、市のトップによる心ない一言だった。

6月4日の第2回説明会で、亀山紘市長は「自然災害の宿命」と述べた。「あの一言がなければ裁判にならなかった」と話す遺族は少なくない。

6月、空席だった教育長に境直彦氏が就き、全遺族宅を弔問する考えを示した。鈴木さん夫妻は慌てて仮設住宅に長男堅登（けんと）君＝当時（12）＝の位牌（いはい）と仏具を用意した。

半年たっても来ない。聞くと、「まだ巴那さんが亡くなったと思っていない」と言われた。息子は亡くなった。遺族の中で序列を付けられたようで、テレビの取材に不満をぶつけた。放映直後の12月末、教育長が弔問に来た。

震災直後、南三陸町などでは遺体捜索に水中ロボットが活用されていた。市教委に要請すると、「多額の予算がかかる」と明細を示された。採用されたのは簡易的な水中カメラだった。

捜索に消極的な姿勢に危機感を抱き、9月に市役所を訪れ、捜索継続を文書で求めた。「娘が見つかってさえいれば…」。娘のために我慢して頭を下げた。

発見される遺体の状況は日に日に悪化していった。頭や手や足がない。長く水に漬かった遺体はろう人形のようなだった。暖かくなり、遺体安置所は強烈な臭いが充満していた。

不明児童は4人に減り、同時に捜索に参加する遺族も一人、また一人と減った。わらにもずがる思いで占い師や霊能者を頼ると、「娘は命を落とした直後にバラバラになった」と言われた。ショックだったが、捜索をやめる理由にはならなかった。

「せめて、骨だけになる前に、少しでも肉片が付いているうちに見つけてあげたい」。炎天下の砂浜、氷が張った川面。震災から丸2年、鈴木さん夫妻は現場に通い続けた。